購読者に電子メールで送信したものをそのまま掲載しています。等幅フォントでお読みください。

＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信　第 70 号（19 巻 1 号）　2008.6.20 発行

■■■ ■　■ ■■■　利　用　教　育　委　員　会　通　信
■　　■　■ ■■　日本図書館協会図書館利用教育委員会
■■■ ■■■ ■■■　JLA The Committee of User Education

・「＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信」は，日本図書館協会図書館利用教育委員会の最新のニュースをお伝えするメールマガジンです。
・＜ＣＵＥ＞とは，Committee of User Education の頭文字です。英語の「cue」はスタートの合図の意。利用教育の普及への願いを込めた誌名です。
・利用教育関連の情報をお寄せください。
・メールマガジンに関するご意見，ご要望はこちらへ。cue@jla.or.jp

==========

□　目次

(1)第 12 回図書館利用教育実践セミナーのお知らせ
(2)第 11 回図書館利用教育実践セミナーの報告
(3)2008 年度図書館利用教育委員会 年間事業計画
(4)第 167 回図書館利用教育委員会の議事録
(5)図書館利用教育委員会からのお知らせ
(6)リレーコラム：りてら式
(7)文献紹介
(8)編集後記
(9)図書館利用教育委員会委員

==========

(1)第 12 回図書館利用教育実践セミナーのお知らせ

●2008 年 7 月 18 日（金）19:00-21:00

市民のための情報リテラシー講座の運営～健康・医療情報の提供を事例として

●講演１　市民向け情報リテラシー講座開催の運営ノウハウ

講師：青木玲子（埼玉県男女共同参画推進センター・図書館利用教育委員会委員長）

●講演２　医学情報検索セミナーを行なう時のポイント（事例発表）

講師：和田佳代子（昭和大学・図書館利用教育委員会委員）

「情報リテラシー講座」とは，いったい何をするのか。市民にとっては情報リテラシーという言葉自体に，まず馴染みが薄かったようだ。情報ニーズが高いと思われ，情報の評価が難しい医学・健康情報のリテラシー講座に取り組み，専門家，地域資源と連携しながらの運営のノウハウを探った。参加した市民は熱心に聴き，好評であった。市民対象の「医学情報の提供と情報リテラシー」講座の実践事例を紹介する。

■会　場：日本図書館協会　2 階研修室
■対象者：図書館職員，教職員，日本図書館協会会員，図書館関係団体，他
■主　催：日本図書館協会
■参加（資料）費：会員 1,000 円／非会員 1,500 円
■申　込：下記の申込書に記入のうえ，日本図書館協会事務局あて電子メールでお申し込みください。
送付先：cue@jla.or.jp
■定　員：50 名，先着順受付
■締　切：7 月 4 日（金）
■詳　細：図書館利用教育委員会ホームページ
http://www.jla.or.jp/cue/

●申込書

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

《図書館利用教育実践セミナー》参加申込書：第 12 回
［2008 年 7 月 18 日（金）］
■申込日：
■氏名（氏名ヨミ）：
■JLA 個人会員／施設会員／非会員（会員の場合は会員番号：　　　　）
■所属：

■住所：
■電話番号：
■電子メール：
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
※記入いただいた情報は，今回の研修の企画・運営の参考にするほか，今後，研修等の情報をお送りする場合などを除き，利用，公表することはありません。
==
(2)第11回図書館利用教育実践セミナーの報告

第11回図書館利用教育実践セミナーを京都で開催
―今年も関西の図書館関係者が多数集合！―

木下みゆき（大阪府立女性総合センター）

日本図書館協会（企画・運営：図書館利用教育委員会）は，2008年3月16日，キャンパスプラザ京都において実践セミナーを開催した。関西での開催は3年目である。今回は「指導サービスの次のステージへ！」というテーマのもと，当委員会の元委員2人と現委員1人を講師に迎えた。まず丸本郁子氏（大阪女学院短期大学名誉教授）が「『力』とするための工夫：教員からのヒント」というテーマで，大阪女学院短期大学での長年にわたる実践を踏まえ，力とするための要素と仕掛けなど図書館員と教員双方の課題を浮き彫りにする講演を行った。続いて，有吉末充氏（京都学園大学）が「情報に批判的読解をどう教えるか：司書に求められる情報評価力」というテーマで，図書館の情報リテラシー指導が文献探索法のとどまっていることへの問題を提起し，利用教育に情報評価を取り入れる必要性などついて講演した。最後に，仁上幸治氏（早稲田大学）が「利用者はなぜ論文検索ができないのか：躓かせないための4つの指導ポイント」というテーマで，実例をふんだんに用いて利用者プロファイルの転換を強調した。指導ポイントとしては，便利さを実感してもらうこと，利用者の動機や課題およびシステムを疑うことを述べた。

セミナーには，関西の多数の大学を中心に各館種の図書館員や教員など昨年を大幅に上回る150名が参加した。アンケートでは，「図書館利用教育をすすめていく上で非常に勇気づけられた」「批判的読解力について体系的な話が聞けて，今後に役立つと思う」などの感想が寄せられた。

==========

(3)2008 年度図書館利用教育委員会 年間事業計画

1 図書館利用教育実践セミナー（年３回）
2 第 10 回図書館総合展フォーラム講演会開催
3 「図書館利用教育ハンドブック学校図書館版」編集作業・作業グループの発足
4 図書館広報グッズの開発
5 ＪＬＡ図書館利用教育実践シリーズ　編集検討研究会（8 月）

==========

(4)第 167 回図書館利用教育委員会の議事録

4 月 30 日，第 167 回図書館利用教育委員会が日本図書館協会で開催されました。

1)『日本の図書館』付帯調査報告書が『現代の図書館』46 巻 1 号（2008 年 3 月号）に掲載されたことを報告

2)第 11 回「図書館利用教育実践セミナーin 京都」
アンケート結果，および会計報告，セミナー開催についての協会への貢献度と非会員・会員の参加費について検討した。

3)通信発行 70 号と 71 号(6 月上旬頃)発行

4)第 12 回回図書館利用教育セミナー 実施企画(メルマガ記事参照)

5)学校図書館ワーキンググループ立ち上げについて(メルマガ記事参照)

6)第 10 回図書館総合展（11/26（水）～28(金)）について
日時：11 月 28 日（予定）
講師：有吉末充氏

7)第 168 回図書館利用教育委員会の開催日程
8 月 22 日　10 時より　日本図書館協会

8)合宿　日時：８月 22 日（金）～8 月 24 日（日）（予定）
実践セミナーの出版計画の具体化，総合展の準備，
その他出版企画書の検討

==========

(5)図書館利用教育委員会からのお知らせ

学校図書館ワーキンググループが発足

有吉末充（京都学園大学）

図書館利用教育委員会は好評をいただいている『図書館利用教育ハンドブック大学図書館版』に続く学校図書館（高等学校）版の出版について，検討のためのワーキンググループを発足させることにしました。

社会のデータベース化，フラット化が進行する現在，個人がアイデンティティを確立することや主体性を確立することはますます難しくなっています。この困難な時代に「考える市民」の育成するために高等学校図書館は何をなしうるのか，それがワーキンググループの検討の出発点になると考えます。情報の探索技術を教えるだけではもはや十分とは言えません。手に入れた情報を取捨選択し，それをもとに自分で考え，社会にコミットしていくような力を生徒が身につけていくために，学校図書館は教育のなかでどのような役割を果たすことができるのでしょうか？

このハンドブックは単なる技術的リテラシー教育のマニュアルを目指すものではありません。もちろん，学校図書館の現場で何ができるのか，その方法を探っている人にとっては平明なテキストであることが必要ですが，そこにとどまらず，学校図書館が秘めている可能性を提示するものであることをも目指したいと思います。従って，読者として想定しているのは，学校図書館の現場で活動している司書教諭，学校司書，その他学校図書館担当者はもちろんですが，同時に，これから学校図書館と協力していく可能性のある教科教諭，学校図書館に関心のある市民やマスメディアをも潜在的読者と想定します。

ワーキンググループでは，これから１年程度をかけて，様々な実践事例を集め，その効果と方法を分析して，どうすればそれを多くの人に応

用可能な形で提示できるのかを検討します。学校図書館での指導の方法だけでなく，教科や担任との連携をどう作るかなど実践を支える背景的な部分にも焦点をあてていきます。その過程で「利用教育ガイドライン」の内容をも検討し，時代にあわせて変更することが必要な部分があれば改訂することもありえます。また同時に，出版か，あるいはWebでの公開など他の方法をとるかなど有効な発表の方法も検討していきます。

ワーキンググループのメンバーに予定されているのは現在の所次の方々です。

（順不同）
・大越朝子さん（元東京都司書教諭，元早稲田大学講師）
・長谷川優子さん（埼玉県立がんセンター図書館司書）
・岡田大輔さん（武蔵野東中学司書教諭）
・金昭英さん（東京大学大学院）
・松田ユリ子さん（神奈川県立相原高等学校学校司書，東京大学大学院）
・天野由貴さん（椙山女学園高・中学校学校司書）
・高橋恵美子さん（神奈川県立大和高等学校学校司書，JLA学校図書館部会部会長）
監修
・野末俊比古さん（青山学院大学）

委員会からの連絡調整担当には有吉末充（京都学園大学）があたります。またグループのまとめ役は松田さんにお引き受けいただきました。

ワーキンググループ次回打ち合わせは６月中を予定しています。

==========

(6)リレーコラム：りてら式

りてらしき人生－旅は情報活用術の良い応用問題－

仁上幸治（早稲田大学図書館）

１．いざ沖縄へ

2000年の全国図書館大会は沖縄の想い出で一杯だ。図書館利用教育分科会は「情報リテラシー支援の最前線へ—実例・教材・ノウハウの交流

サロン―」というテーマで沖縄県青年会館で開催されて，参加者 124 名で大いに盛り上がった。８つのポスターセッションのひとつとして僕ら私大図協企画広報研究分科会は「共同利用パスファインダーバンクの研究開発－ツールの共有化と個別化の両立を求めて－」と題して研究発表を行った。主催者側委員であり発表者でもあった僕が，委員会と分科会の両方のメンバーおよび友人知人のでツアーを組んではどうかという話をしたら，「言い出しっぺが幹事」の法則で，ツアコン役を務めることになってしまった。今，その準備プロセスを振り返ってみると，情報リテラシー教育の貴重な教訓が含まれていたように思えてくる。

２．事前リサーチは航空券から

まずは２泊３日の航空券とホテルを自前で予約するか，パックツアーを申し込むかの選択だ。航空券は，大会オフィシアルツアーの往復運賃３万７千円を基準に考えると，２泊分のホテル代をプラスした合計がツアー費用ということになる。宿泊費１泊７千円なら２泊で１万４千円，合計５万１千円。これがベースライン。旅行会社のパックツアーのパンフレットを集めて比較すると，２泊３日の価格はかなりバラついていることがわかる。航空券の値段は発着時刻が午前と午後では異なるし，早朝や深夜だとやや低価格の設定になっていて，早割もあるがキャンセル料のリスクも生じる。資料の向こうに旅行業界の経済の仕組みが見えてくる。

３．奥深いホテル選び

ホテル選びは，当然ながらグレード次第だ。眺望の良い高層階を選べば高くなる。施設設備の差も大きい。大浴場あり，できれば露天で天然温泉，プール付きなら最高というのが個人的な希望条件だ（笑）。ホテル比較には，付加サービスのチェックも欠かせない。ウェルカムドリンク，プールサイドのトロピカルドリンク，館内の食事買物割引など，パンフレットの注の細かな文字までしっかり読めば，実にいろいろなサービスが付いていることがわかる。小さな差でも，ないよりはちょっとうれしいのが人情だ。

もちろん，同じ価格ならデラックスなほうがいいに決まっている。逆に言えば，使いきれない施設や付加サービスをカットして安く上げられればそれに越したことはない。どうせ夜は反省会等で遅くなるのだから，帰って寝るだけだろう。だったら，ゆとりの洋室ツインよりもワンラン

ク安い和室４人部屋で十分だということになる。

　ホテルの立地も重要。空港と会場からの距離は移動時間と交通費に影響する。空港送迎バスの有無も要チェック。反省会なども含めた行動計画しだいで深夜タクシーの心配もしなければならない。翌日現地図書館見学を予定するなら延泊料金やレンタカーの手配も調べておきたい。そんなこんなで，パンフレットやガイドブック，新聞の切り抜き，ウエブページのプリントアウトなどのマーカーや付箋だらけの資料の山ができていく。

４．すべては目的しだい

　勉強だと面倒くさいが，旅行の下調べなら全然苦にならないから不思議だ。工夫しだいでみんなの満足度もアップすると思えば張り合いもある。那覇市内に化石海水温泉の露天風呂とプール付きのホテルがあることを発見した嬉しさでさらにアドレナリンも増える。何よりやってみて初めてわかる旅情報もたくさんあって，調べる作業自体が楽しくなってくるのだ。ヘタすると本末転倒になる危険さえある。

　現地情報は，地図と首っ引きで会場の位置とホテルとの間の交通情報を集める。忘れてならないのが現地在住者情報だ。レストランやライブハウス，ビーチなどの最新情報は，東京在勤中に知り合って沖縄へ帰郷した友人に相談するのが一番確かだ。資料情報だけでは，商業的なバイアスを補正しきれないからだ。

　事前リサーチの結果，ある程度資料が集まったら，プランの最終選択肢を絞る段階になる。参加希望者の意見を聞き，費用だけでなく移動時間，利便性などの情報を総合的に分析・評価する必要がある。整理された選択肢の中から最終的にどれを選ぶか，それが最後の大問題だ。どのプランもそれぞれに捨てがたい良さがあるから，実に悩ましい。目的や，それを達成する方法手段も制約条件も複数あるとなれば，選択する基準も単純ではない。何を重視するのか，優先順位をはっきりさせないといけない。やはり，行動日程を細かく煮詰めておくことが前提になる。そこまですっきり整理できてしまえば，あとは目的に合った最適プランを選べばよいだけだ。

５．問題解決と情報活用

このように，さまざまなメディアを通じて情報を探索・入手，整理・分析，加工・発信することで，ツアーの決定、参加者の確認まで持ち込むプロセスを考えると，高校時代の伊豆大島クラス旅行を思い出さずにはいられない。旅行委員としてやったことはほとんど同じだ。パンフレットに書いた島の地図や観光スポットの解説は今でも再現できそうなくらい記憶も鮮明だから，よほど入れ込んで作ったのだろう。

学生に情報リテラシーを習得してもらうには，修学旅行の計画作りや報告発表会が有効だということの根拠がこんなところにあったのだ。自分が興味があることには飽きずに主体的に取り組めるし，やってみると楽しいし，想い出を人に伝えたくなるし，そのためにはいろんな準備を積極的にしてみようと思ったりする。情報探索からプレゼンテーションまで，通して学べるのだから，教育効果は抜群だ。そのうえ，現地へ出かけてからも，時々刻々と次の行動を選択する決断力を鍛えられる。旅は，まさに「問題解決のための情報活用」の応用問題そのものではないかと今更ながら思い至る。

６．予想以上の収穫

会場設営はみんなが異常なくらいのハイテンションでやり遂げた。分科会当日の講演も各発表も自分たちの発表も予想以上の大成功だった。主催者も参加者も完全燃焼の充実感に包まれて終了した。国際通りでの反省会と二次会で一同思いきりハジけた。

運営上も貴重な教訓がたくさんあった。県立武道館の大会受付前の日図協のブースで「りてらしい」Ｔシャツ（「たのもしい・めざましい・すばらしい・りてらしい」の文字入り）を完売した経験から，気温が高く、スーツ姿で受付に現れる人が多ければＴシャツが飛ぶように売れるというマーケティングの法則を発見できた。ALA のポスターやしおりなどの販売行為が禁止であれば，会場撤収協力者お持ち帰り方式でカンパを募る形にすることで撤収をスムーズに終わらせるコツを学べたことも大きな収穫だ。等々。

７．後日談と図書館利用教育の教訓

アフターの見学会やリフレッシュタイムの濃密な時間は今でも夢のようだ。現地の首里城近くの友人宅での温かい心からのおもてなしは一同一生忘れないだろう。カメラ，携帯電話，買出し，レンタカーなどの手

配に自主的に動いてくれたメンバーのチームワークも見事だった。感謝の言葉で羽田解散。ツアコン冥利に尽きる一瞬だ。

帰京後しばらくは，お土産で買い込んだシーサーと星の砂とヨナグニ花酒とトウフヨウなどを眺めてシミジミぼんやりしてしまったメンバーも多かったのではないか。参加者メーリングリストもできて後日，沖縄ツアー同窓会を開催した。沖縄料理屋に写真持参で集合だから，気分はあの夜の那覇の国際通りにワープする。今も沖縄のニュースや広告を見るたびに，リアルに蘇るあのツアーの記憶……。

旅のプランニングは，多かれ少なかれ誰でも自分なりに実践していることだし，もっと一般化して，人生そのものが旅だと言えばちょっと陳腐すぎるか。もちろん，行き当たりばったりのブラブラ旅の良さは認めるとして，今回のような情報リテラシー勝負の計画実行型の旅にはそれなりの方法論があることは確かだ。CUE メルマガ用原稿だからとちょっと無理なこじつけっぽかったらすみません。(^^ゞ　しかしまあ，一片の真実は含まれていそうに思えるので書いてみました。みなさん，どうでしょうか？

==========

(7)文献紹介

公共図書館における「課題解決型サービス」の実例の紹介とともに，理論面での検討を行っている１冊
―文部科学省の協力者会議や審議会の報告・答申も合わせて参照を―

春田和男（筑波大学大学院生）

文献：大串夏身編著『課題解決型サービスの創造と展開』（図書館の最前線 3）青弓社，2008，261p. 2,000 円（税別）

本書のタイトルにある「課題解決型サービス」とは，地域の課題解決のために，公共図書館が資料，知識，情報を提供するとともに，関連する講演，相談会などを開催するサービスのことである。本書では，ビジネス，仕事，生活，健康・医療，食育などのサービスの状況や実際について報告するとともに，理論面での検討も加えている。

本書は 11 章からなる。第１章では，大串夏身氏（昭和女子大学大学院教授）が，公共図書館において「課題解決型サービス」を提供する意義について論じている。

第２章では，小林隆志氏（鳥取県立図書館）が，鳥取県立図書館におけるビジネス支援事業について紹介している。

第３章では，宮下明彦氏（長野県図書館協会）が，上田情報ライブラリーにおける青年・女性のキャリアアップと就労支援，上田地域若者の自立支援の取り組みについて紹介している。

第４章では，千種幹子氏（福岡県立図書館）が，幼児から高齢者まですべての世代の人々に利用される役に立つ図書館をめざす福岡県立図書館の取り組みについて紹介している。

第５章では，中山康子氏（東京都立図書館）が，「健康情報サービス」の定義と内容を示したうえで，東京都立中央図書館の取り組みについて紹介している。

第６章では，宮川陽子氏（福井県立図書館）が，福井県立図書館と若狭図書学習センターにおける食育情報の提供について紹介している。

第７章では，中井康恵氏（鳥取県立米子工業高等学校）が，鳥取県立図書館による高等学校図書館への具体的な支援策，学校図書館と公共図書館の連携について論じている。

第８章では，奥村和廣氏（東京都立中央図書館）が，公共図書館における法律情報サービスについて論じたうえで，東京都立中央図書館の取り組みについて紹介している。

第９章では，桑原芳哉氏（横浜市中央図書館）が，行政支援サービスの定義とこれまでの取り組みの経過を示したのち，横浜市立図書館における「庁内情報拠点化事業」について紹介している。

第 10 章では，大塚由良美氏（桑名市教育委員会）が，桑名市立中央図書館における郷土資料の保存活用事例について紹介している。

第 11 章では，山崎博樹氏（秋田県立図書館）と蛭田廣一氏（小平市企画政策部）が，公共図書館における地域情報の現状と課題について論じるとともに，小平市立図書館の取り組みについて紹介している。

公共図書館における「課題解決型サービス」の重要性については，本書の第１章に書かれているように，文部科学省「これからの図書館の在り方検討協力者会議」が 2006 年に発表した「これからの図書館像―地域を支える情報拠点をめざして―（報告）」や中央教育審議会が 2008 年に発表した「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～（答申）」に示されている。本書とともに，これらの報告や答申も参照されることをおすすめしたい。

［参考文献］

１）これからの図書館の在り方検討協力者会議「これからの図書館像―地域を支える情報拠点をめざして―（報告）」2006，94p.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/04/06032701.htm

２）中央教育審議会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～（答申）」2008，131p.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/index.htm
（［諮問・答申・報告］の 2008 年 2 月 19 日をご参照ください）

==========

(8)編集後記

第 70 号をお届けします。今号では，７月に東京で開催される図書館利用教育実践セミナーのお知らせを掲載しました。関心のある方はぜひご参加ください。皆様のご参加をお待ちしております。　　（春田）

==========

(9)図書館利用教育委員会委員

（委員長）
青木 玲子　　：埼玉県男女共同参画推進センター
（委員）
赤瀬 美穂　　：京都産業大学図書館
有吉 末充　　：京都学園大学人間文化学部メディア文化学科

石川 敬史　　：工学院大学図書館
木下 みゆき　：大阪府立女性総合センター情報ライブラリー
戸田 光昭　　：駿河台大学名誉教授
野末 俊比古　：青山学院大学文学部
春田 和男　　：筑波大学大学院博士課程
和田 佳代子　：昭和大学歯科病院図書室
久保木いづみ ：日本図書館協会事務局

＜ＣＵＥ＞利用教育委員会通信　第 70 号（19 巻 1 号）　2008.6.20 発行

・バックナンバー
http://www.jla.or.jp/cue/
・配信登録・変更・解除・お問い合わせ
cue@jla.or.jp

※本紙は Yahoo! Groups を使って発行していますが，日本図書館協会および当委員会，ならびに本紙の内容と Yahoo! とは関係がありません。

戻る